

二次元ぶち文庫

お風呂で 学園 ラブ×2 ウィッチズ

SCHOOL
WITCHES



夜士郎
表紙イラスト…ふんぼん

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『お風呂でラブ×2 学園ウィッチーズ』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



お風呂で
学園
ラブ×2
ウィッチズ
SCHOOL
WITCHES

夜士郎

表紙 / ぶんぽん

登場人物紹介

Characters

ルイ

魔法学園の生徒で天才と言われている少年。まだまだ精神的には子供で性的な事になると顔を赤くして俯いてしまうほど。

フィーネ

ルイのクラスメートの女子。努力タイプの秀才で天才型の主人公を妬んでいるが、それも好きの裏返しなツンデレ。

エリナ

ルイのクラスの担任教師。悪戯好きで人を困らせるのが大好き。

灼光が、少年を包む。輝く魔法陣が、小さな部屋の中を赤く染め上げる。

少年——ルイの唇が小さな呪文を紡ぐ。

眩かれる最後の言葉。そして。

彼の姿が——まるで空気に溶けゆくように、消えていく。いまだ少年とも呼べぬ童のよ
うな顔も、痩せた体軀も、すうと背景に同化していくのである。

「やった！……のかな？」

鏡を見て、ルイは呟く。そこには確かに、まるで吸血鬼の伝承の如く鏡に映らぬ己があ
った。けれど、ふと自分の身体を見回してみれば、肉眼にはいつもと変わらぬ姿が映し出
されている。勿論そうでなければ、いろいろと不便なのだろうけれど。

不可視の魔法。

それは魔法学園、■等部二年のルイにとって、まだ教えては貰えないはずの魔法だ。け
れど、自分にはそれを行使する実力がある——その自負が、彼にこの魔法を使わせた。

「……ちよつと、外に出てみようかな？」

もし発覚すればただではすまないだろう。だがルイは、こみ上げる実証欲求を抑えるこ
とができなかった。夜も更けている。今ならこの個人寮の中を出歩く生徒もそうはいない
だろう。

扉を開き、恐る恐る、廊下に出てみた。

そのまま、しばらく歩く。やがて、一人の男子生徒が向こうからやってきた。緊張に包まれながら、ルイは、彼の肩をぽんと叩く。はたして彼は、ふと立ち止まり、あたりを見回して――。

「……? なんだ?」

戸惑いながら、目の前のルイに気づかずそのまま立ち去っていくのである。

「よし! やった!」

まるで気が付いた様子もなかった。まずは第一関門クリアだ。意気も揚々と、さらに先へと進んでいくルイ。ところが――。

「ちよつと、そのあなた。何をしていますのっ?!」

きんきんとした誰何の声に、びっくりと肩を震わせて、そちらに首を向けてみれば。

こちらを射抜く、煌めく緑宝石の瞳。

魔法学園のクラスメート。

委員長のフィーネが、そこにいた。

あどけなさを残す小さな顔の、そのどこまでも白い肌は紗絹を思わせる。大きめの瞳は微かに尖り、細く流麗な眉と一緒につんと吊り上がっている。品のよい小鼻と、薄桃色の透き通るような唇は緩みなく、豪華な程の金糸の髪と相まって、どこか高貴な印象を抱かせる。

背は、どちらかと言うと低いだろう。いつもは色気もない黒いローブに身を包んでいる彼女は、今は白いナイトウェアを着込んでいて、薄手の上品な布地は少女の細身の肢体をくつきりと映し出している。身長に比して長めの、柔らかな手足。僅かに膨らんだ、薄い胸が、改めて彼女の少女性を意識させる。

——美しい少女だった。

だが、誰しもがまず目にするのは、そんなフィーネの美貌よりも、その頭の両脇にぶら下がった大きな縦ロールであろう。

もはや、ドリルである。

いつも思うのだが、あれはどうやって成形しているのだろう。邪魔にはならないのだろうか。どう考えても生活をしていく上で不便極まりないと思うのだ。

——などと、どうでもいいことを思考する場合はなかった。

(ば……ばれた!!)

魔法の効き目が薄れたのか。あるいは彼女の魔力が、ルイの魔法を看過できるほどに高いのか。ぷりぷりと頬を膨らませる彼女は愛らしいけれど、今は見惚れている場合でもない。とにかく、なんとか言い訳をしようと考えを巡らせていると。

「ごつめーん、委員長、ちよつと、小腹がすいちゃつてさあ……」
背後からそんな声が聞こえた。

振り返ると、そこに一人の女子生徒がいた。その手には、学園を抜け出し、街に降りねば買えないパン屋の紙袋が握られている。

「八時以降の勝手な外出は禁則事項ですわよ。魔法学園の生徒たるもの、一般人にも畏れられる存在とならねばならないことがおわかりですか？ 次は見逃しませんわ、早くお部屋に戻りなさいませ」

腕を組み上から視線で言い放つフィーネに、頭を下げながら女子生徒は退散する。

「全く。魔法使いとしての自覚が足りませんわっ！ 彼を見習って欲しいですわね」
彼とは誰のことだろうか？ ちょっぴり頬が、赤いようだ。

「……ん？」

と、不意に彼女、何やら目を細めて、こちらを凝視してくる。まるでそこに何か違和感があるとも言おうように、目と鼻の先にまで顔が近づいてきて、硬直するルイ。

緊張感から——ではない。

なんとも無防備な彼女の浮いた襟元から、桃色のブラジャーが覗いているのである。いや、それどころではない。そのブラも僅かに浮いて、隙間から見えるほんのりとした膨らみと、ピンク色のあれはまさか——。

「……気のせいかしら？」

首を傾げながらも、縦ロールを振り回して踵を返すフィーネに、ルイはほっと息を吐く。

——少々、残念ではあったが。

「うん、よしよし、大丈夫みたいだ。さーて、もうちょっと回ってみようかなー」
続けて食堂や、娯楽室、トイレ等々。どこに行ってもルイに気が付く人間はおらず、わざと物音を立ててみても、みんな不思議そうに周囲を見回すだけだった。

完璧だった。完成だ。

満足感が胸を膨らませて、ルイは部屋へと戻ろうとした。その時。

「あ……あれ？」

不意に、目の前が真っ白になった。

「な、なんだこれっ！ うわわっ」

急に失われた視界に狼狽する。今自分がどこに立っているのかもわからなくなる。落ちて着け、とにかく落ち着けと、自らに言い聞かせ。その背中を、何かに押された。

「あれ？ なんだろ？」

女の声に、だがその姿を確認することもできない。たたらを踏む足下の感触が、固いリノリウムから絨毯を敷き詰めたようなそれに変わる。どうやら、廊下からまた別の部屋に入ってしまったようだ。

（な、なんだ、ここ？）

なんとか、位置関係を把握しようとするが、混乱する頭はうまく働いてくれない。手探

女の顔も間近な対面の座位、そびえ建つ肉の塔を眼下にして不安に揺れる少女の瞳がまざまざと見えた。ごくりと喉を鳴らし、彼女はおずおずとルイのお腹に手を置いて

「そ、それでは……、行きますわ……よ」

ゆっくりと、腰を落とそうとする。けれど彼女の肉裂に鈴口が触れるや、びくりと華奢な肢体を震わせ、腰が止まった。

「ふう、はあ……、はあ——あ」

「ね、ねえ、フィーネ？ そんな無理をしなくても、僕なら大丈夫だから……」

そう、氣遣うルイに、

「な、何を言ってますのっ?! このくらいどうってことないですわよ、こ、このくらい……」

氣丈に笑みながらもその口の端は引きつって、それでもゆっくりと……震える腰を沈めていった。

「~~~~~っ!」

声にならない悲鳴が、薄唇から噴出した。肉裂を左右に断ち割る亀頭の先端。

みりり……みちち……と。埋まっていく。突き刺さっていく。触れば火のつくような

——そこは、熱くて窮屈な肉の洞。

（う、わ、あ……、フィーネの……お腹の中に……、刺さっていく……）

狭隘きょうあいな穴に、亀頭の傘がつつかえて、彼女の腰がびくりと震える。それでも、愛液と湯とが混じりあつた潤滑液に、ぬじゆるりと肉塊は滑り込み、

「んあつ！ ……ああう、入ってますわ、入ってますわ……」

ぽつぽつと額に汗を浮かべて、苦悶に耐える細い身体は紅潮し、小さな乳房の先端で、桃色乳首が固くしこつていた。

肉茎が、蝨く内壁に包まれる。無数の襞が海綿体を締めつけて、たまらなく気持ちいい。一度射精していなければ、とても耐えられなかったことだろう。

——亀頭の先つぽが、閉ざされた肉の門へと到達する——。

「あ……」

小さく呻くフィーネは、己が処女門を前にして怯えたように動きを止めた。

——初めてなんだ。

女の子の初めてがこんなことでなくなるなんて。ダメだ。こういうのは、好いた相手と行うべきなのだ。

「フィーネ？ もう——」

「責任——取って下さいませね」

柔らかな微笑が——その顔に浮かんでいた。そして。

めりめり……ぶちいっ。

落とされた腰の中で、処女門を引き裂いたペニス、彼女の最奥に到達する。瞬間、凄まじい締めつけが、男根の全体に襲いかかってくる。

「ひうつ、あ、ひい、あ……。入った、あ……。ルイのが、ん、あ……」

耳をくすぐるソプラノの悲鳴。

処女の花唇を喪失して、その華奢な肢体は苦痛に打ち震えているというのに。

「あはう……。熱い、ですわ……。ルイの、固くて、ああ……」

彼女の声にはどこか嬉しげな、甘い響きがあった。

「大丈夫よ、声を出しても。聞こえないようにしたから」

いつのまにやら背後に回ったエリナが、そう言う。何かの魔法だろうか、確かに先ほどから、こちらに奇異の目を向ける者がいなくなっていた。

「軽い認識障害もね。まあ、派手にしてるとばれちゃうわよ？」

その言葉に安心したというわけでもないのだが。身体が勝手に、腰を動かしてしまう。「んあつ、くううん、駄目、まだあ……。動かしちゃ、ふああ……」

ぎゅうつと目をつぶって、苦悶に歪むフィーネの瞳から一滴の涙が流れ、顎を伝い湯に落ちた。それは、水面にふわりと浮く赤い薄膜を引き裂いて、お湯と混じりあう。

「……ふ、フィーネ……」

湯船の中に、ゆらゆらと。彼女の血が舞っている。自分のそれが彼女の初めてを奪った

のだと、改めて思い知らされて、ルイの胸中に浮かぶのは、罪悪感と——それに倍する程の、暖かな何かであった。

汗にまみれた彼女の顔は、ルイのペニスを受け入れてなお愛らしく輝いている。高まる体温に赤く染まる肌。時折胸板に触れる小さな乳房が、びつくりするほど暖かい。

湯と混じって潤いの増す蜜の溢れる花口に、ずぶずぶと突き刺さる肉塊が収斂する無数の襞を掻き回すと、

「あひっ！ あ、はう、こんなにっ、……気持ちのいいものなんですの……？ はじめてなのに、わたし……、ひいん……」

金糸の縦ロールを揺らし、背筋をさざ波のように震えさせ、彼女は喘ぐ。ぷくりと尖った乳首が赤みを増し、肋の浮く滑らかな腹部がうねくり、若肉の香る少女脚をひくんと打ち震わせる。全身をルイのペニスに翻弄されて、まるで性の受容器官と化すフィーネである。じゃぶじゃぶと波打つ水面。

「そんなに気持ちいいのはね？」

フィーネの背後に取りついたエリナが、耳元に口を寄せ囁く。

「——好きな人としていてるからよ？」

不意に。フィーネの内部が熱く燃えた。

「なっ……、は、あ、ん、……、そう、なんですの……？ ああ……、そうなのですわね

「……あ、ああうあ……」

さわさわと、エリナの細指が少女の裸身を這いずり回り、ひくりひくりと震えるフィーネ。きつく締め上げてきた肉壺は少しずつ緩んで、奥から溢れ出す熱い蜜液が亀頭に降り注ぐ。

「はあ……、ルイ、ルイ……、ああ……」

甘くとろける唇がこの名を囁る。それは脳芯を叩く打撃。彼女の体温が、ペニスを通じて流れ込んでくるようで——熱い塊が、下腹からこみ上げてくる。男根を灼く快樂の責めに、限界が近づいてきた。

かぷりとフィーネの耳たぶをエリナが噛む。ひきゃんつ、と、愛らしい悲鳴を上げて跳ねる少女の狭苦しい肉孔が、きゅきゅつと締めつけてくる。

「あああつ、もう、もうっ……、僕つ、でる、でちゃいます……からっ」

身体を離すようにと警告の呻きを上げるルイに、けれどエリナはにんまりと笑い、

「そう？　じゃあ……」

その手が繋がらいう二人の股間に伸びて、フィーネの股間に屹立する肉豆を、きゅうつとつまみ上げたのだ。

「~~~~!!　な、なに、ひあつ、ああつ」

びく、びくっ！　びくびくびくっ！

さながら雷撃に打たれたかのように。

クリトリスを刺激されたフィーネが、全身を激しくのたうたせた。赤みがかつた肉芽はまるで彼女の理性を破壊するスイッチであるかのように――

「ああふあああつ、なんですのこれ、い、くうあつ……、ひ、くいあああつ……」
 肋を浮き立たせ仰け反るフィーネが喉の奥から引き絞るような悶絶の悲鳴を上げ、桃色の唇からは涎が糸を引いて落ちる。眼球からは涙が溢れ、そこには普段の楚々とした表情の欠片もなく。

――淫らに乱れた有様のフィーネを見て。可愛い、と。思った。

「くすくす。ほらほら、二人とも……イっちゃいなさいな」

赤い口から淫靡な吐息を漏らし、赤めく顔も興奮に燃ゆるエリナの指先は容赦なく萌芽を責め立てて、

「ひきやう、あきゆうつ！ ダメですの、そんなの、もう、もうつ……あああつ」

縦ロールを振り回し悶える小さな身体の中で、激しく収斂する膣肉の襞。ずぶずぶと子宮にまで引きずりまれそうなペニスに、もはや堪えきれぬ熱塊がこみ上げる。

きゅい、と。エリナが指を捻った。

「あひい！ ル……、ルいいいっ」

ぎゅうつ、と、フィーネが抱きついてきた。回された腕がきつくルイを締めつけて、彼

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>